

紀 要

- 地震考古学の発展に向けて濱 修(1)
- 滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について
.....中村 健二(8)
- 弥生時代前期～中期の土器観察覚え書き
—針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡の弥生土器—.....小竹森直子(14)
- 古代近江における職能漁民の動向
—松原内湖遺跡出土の刺網系漁網錘の分析から—.....大沼 芳幸(21)
- 滋賀県大津市国分所在礎石「へそ石」の周辺
.....小松 葉子(31)
- 近江国野洲・甲賀郡境をめぐる一考察
—大山川流域の条里地割を手がかりとして—.....辻川 哲朗(44)
- 天井川の生い立ちを考える その3
—天井川と埋没河川との関係について—.....重田 勉(52)
- 比良山系の山寺
—大津市歓喜寺遺跡について—.....小林 祐季(57)
- 明治山と旅順
—乃木希典を求める人々—.....松室 孝樹(60)

25

弥生時代前期～中期の土器観察覚え書き

一針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡出土の弥生土器一

小竹森 直 子

1. はじめに

現在、整理調査を担当している高島市針江浜遺跡と近江八幡市長命寺湖底遺跡は、いわゆる湖底・湖岸遺跡と称される遺跡である。湖西北部地域に所在する針江浜遺跡は弥生時代前期に浜堤上に営まれた分村的な集落跡であり、湖東地域に所在する長命寺湖底遺跡は縄文時代中期から近世に至る遺物包含層が汀線際に形成された遺跡である。針江浜遺跡の弥生時代前期の土器資料は、湖西北部地域において資料的に希薄な時期を埋めるまとまりのある資料群であり、長命寺湖底遺跡の弥生時代前期末～中期前葉の土器資料も湖東地域における様式変化を辿ることができる資料群として注目される。異なる地域の連続する時期の弥生土器をまとめた状態で同時期に観察し、検討・分析できることは、業務の一環とは言うものの、弥生土器を研究対象とする筆者にとってはまたとない機会である。本文は、これらの資料群の観を通して抽出された各資料群を特徴付ける要素をまとめ、各資料群を近江の弥生土器の中で位置づけるための作業の一段階とするものである。

2. 針江浜遺跡の弥生時代前期の土器

(1) 遺跡の概要

針江浜遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財

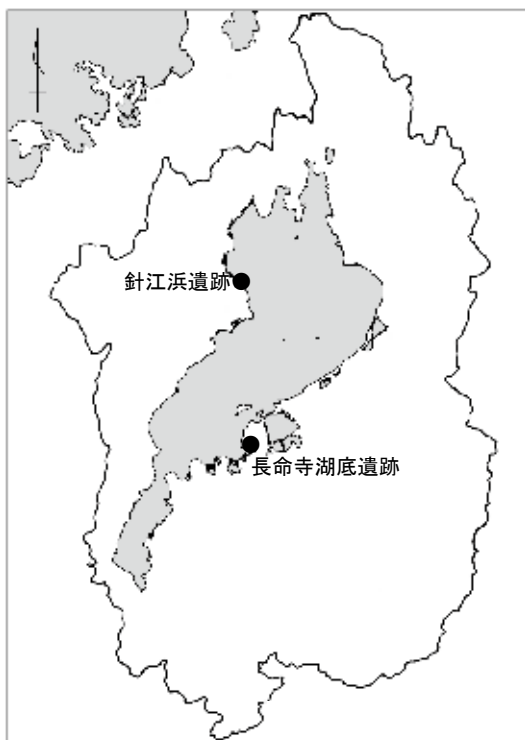


図1 遺跡位置図

保護協会1988・1989・1990)は、琵琶湖の西岸で北湖に面した湖西北部地域に所在し、現在の湖岸から200m～400m沖合の浜堤上に形成された遺跡である。背面＝内陸側には安曇川が形成した高大な高島平野が広がり、山地を介して日本海に面した若狭・丹波に接している。昭和62年度から平成元年度に琵琶湖開発事業に伴い発掘調査が実施され、溝や柵で囲まれた竪穴住居・掘立柱建物・土坑群を検出し、溝からは廃棄されたと考えられるほとんど磨滅していない弥生時代前期の土器類が多量に出土した。また、弥生時代中期前葉に発生した地震による墳砂跡や湖岸に群生していたであろうカワヤナギの埋没林、古墳時代にかけての耕作地に伴う水路や木道等も検出している。遺物は、弥生時代前期の土器類が大半を占め、木製品・石器の他、炭化米を含む種子類・魚骨等の微細有機質遺物も出土している。また、浜堤であることから遺構面形成土は砂質であるが、人頭大程度の大きさの粘土塊が出土しており、土器製作用の粘土である可能性もある。

(2) 弥生時代前期土器群の諸要素

発掘調査ではコンテナ約120箱分の弥生時代前期の土器が出土しており、その中から約600点を実測し観察を行った。ほぼ完形に接合・復元可能な個体もかなりあり、小片にいたるまで使用による摩耗・剥離以外の磨滅はほとんど認められない。また、大半が居住域を取り囲む溝内から出土していることから、土坑に埋納されたと推定できる事例を除けば、居住域から投棄・廃棄されたと判断できる。よってこれらの土器類は、単位集団における土器の器種組成や土器制作手法の系譜・系統やその好みを読み取ることができる良好な資料であると言える。このことを踏まえ、実測対象資料の抽出から観察にいたる作業工程の中で念頭においた峻別・比較のための指標としたのが、形態・調整技法・文様構成および施文手法である。

【甕形土器の口縁部および体部形態】

口縁部の形態は、成形時にすでに決定されている。つまり、どのような形態を作るのかによってその成形・整形手法が自ずと異なるからである。この点を踏まえて甕形土器類の口縁部を観察すると、概ね次の4種類の形態に分けることができる。

①短く外彎もしくは外反する。

頸部にあたる幅1.5cm程度の部分を指頭で挟み込んで強く押しながら外反させた後、ヨコナデによって端部を丸くあるいは面を持たせておさめて口縁部を整形する。特に口縁端部直下から頸部外面には、指頭圧

痕による凹凸が顕著に残存するものが多く見られる。また、上方に向いた口縁部内面が1cm程度の幅でわずかに内彎する面となっていることから、おそらくは親指を強く押し当ててヨコナデを施したと想定される。

②頸部から連続して外彎して口縁部となり、断面倒J字形となる。

肩部から頸部そして口縁部までをヨコナデによって連続的かつ滑らかに外彎する形態とし、口縁部から頸部・肩部にかけて外面では縦方向、内面では横・斜方向のハケで仕上げられたものが目につく。ハケは通常のハケであり、条痕系あるいは弥生時代中期以降に顕在化するいわゆる粗いハケメではない。

口縁部①が視覚的に「口縁部が短い」という印象を与えているのに対して、口縁部②は頸部からの連続性もあり、「長めの口縁部」との印象を残す。

③ほぼ水平になるまで屈曲させ、断面が倒L字形となる。

ほぼ直角に外反する口縁部ではあるが、内面はあくまでも曲面であり、稜は形成しない。ヨコナデにより端部が丸めに整形し、口縁部内面に横方向のハケが施されている。形態的には、遠賀川壺式に相当あるいは近似するものである。口縁部①と同様に外方へのびる部分が短めのものでは、頸部の指頭圧痕が明瞭に残っており、成形・整形手法は共通しているようである。

④断面が明瞭な「く」の字状を呈する。

頸部から先の口縁部～端部の形状と手法だけを見れば、口縁部①・②との差異はほとんど無いとも言えるが、肩部が張っているからこそ、くの字状になるとも言える。

また、頸部から肩部にいたる体部上半の形態は、その特徴からおおむね次の4種類の分けることができる。

A：体部最大径部が頸部直下に位置し、底部から頸部にかけて逆ハの字状に直線的に立ち上げる。

漏斗状あるいは播鉢状とも言える形態であり、視覚的に実際の器高よりもやや扁平な印象を受ける。

B：頸部直下の文様帯部分がほぼ直立する。

下半部は体部Aとほぼ同形態となり、全体として砲弾形となる。

C：文様帯直下に体部最大径部が位置し、肩部がやや丸みを帯びる。

体部Bとの差異は少ないが、体部上位がやや丸みを帯びることから釣鐘形となる。

D：肩部が大きく張り、体部上半が半球状を呈する。

頸部から肩部にかけて内彎して広がり、口縁部④との組み合わせとなり、数的には極めて少ない。

口縁端部のヘラ工具あるいはハケ工具による刻目文の有無、肩部文様帯の有無、さらには後述する調整手法の差異も含めて各形態にはかなりの変異幅があるが、主に湖南地域の弥生前期の土器を見慣れていた筆者の目には、短く外反させる口縁部①と体部上半の張りがほとんど無い体部A・Bの組み合わせは、違和感を抱かせた最大の要因である。この形態と組み合わせ自体は、遠賀川系土器としては通有であるとも言える。湖南地域の資料においても眼にすることができし、特に違和感を抱くことは無かったが、針江浜遺跡では「目に付く」のである。つまり、感覚的にはあるが4つの口縁部形態の中では量的に多いとの印象が強い。感覚的ではなく、数値的・客観的な方法での比較が必要となることは明らかである。

口縁部②も遠賀川系土器であることは明らかであるが、口縁部外面～体部内面に見られる横方向のハケ調整は、弥生時代前期末～中期初頭の成立し定着する倒J字形口縁の粗いハケメ調整甕形土器₍₁₎（小竹森1990・1997）との関連性・連続性の有無を検討が必要である。遠賀川系と倒J字形口縁の粗いハケメ調整甕形土器の時期的な位置付けの明確化と共に、口縁部形態と調整手法との組み合わせにおける規制の有無を他の遺跡も含めて確認しなければならない。

口縁部③は、遠賀川壺式を特色付ける属性の一つではあるが、これだけでは典型的な遠賀川壺式あるいは搬入品で

口縁部形態				体部形態			
①	②	③	④	A	B	C	D
							
 中間形							

図2 針江浜遺跡 弥生時代前期甕形土器分類模式図

あるのか否かの判断は早急である。口縁部③については、針江浜遺跡においては割合は低いものの一定量含まれている。その中で、胎土の特色と後述する施文手法含めて明らかに搬入品と判断できるものは1点のみである。

【甕形土器の調整手法と施文手法】

甕形土器の体部内外面の仕上げ調整は、外面はハケ調整を基調とするものの、詳細に観察すると内外面共にハケ調整とナデ調整の2種に大別でき、量的には極めて少ないが、内面から少なくとも体部上位外面のハケメをナデ消してしまうものも認められる。さらにハケ調整は、施す方向と部位・範囲によって異なる特徴となる。体部外面のハケ調整は、縦～斜方向を基調とし、4回程度に分けて施されている。その段階毎にハケを施す方向を若干切り替えるのが主体であるが、肩部に施された複数条のヘラ描直線文帯直下に横方向のハケを用いたものは、縦～斜方向のハケと比較すると趣が異なる。また、口縁部内面に残る横方向のハケ調整あるいは仕上げとして施す横あるいは斜方向のハケ調整は、弥生時代中期以降の粗いハケメ調整を基調とする甕形土器に通じる調整であると同時に地紋あるいは櫛描文に通じる視覚的文様効果をもたらしている。

条痕や粗いハケメによる装飾性を加味した地紋的調整は、弥生時代前期～中期初頭において大和から近江・若狭・美濃・伊勢・三河あたりのかかなり広い地域において好まれた手法である。伊勢湾地域ではその技術的系譜を縄文時代晩期からの条痕文土器に求めることは極めて妥当性が高いが、それらが当該期の土器組成において客体的存在となる近江を含むそれ以外の地域においては、外的影響の一つとしては否定できないまでも、単純に条痕文・条痕文系土器とを結びつけることはできない。特に近江においては、弥生時代後期末葉まで続く在地土器群を特徴付ける粗いハケメ調整と高い装飾性への強い執着・固執の原点とも言うべき弥生時代前期土器に見られるハケ調整への指向性の高さは、土器観察・分析を行う上では極めて重要なポイントであると考えているところである。

甕形土器に施される文様は、口縁端部外面のヘラ・ハケ工具による刻目文と肩部に施されるヘラ描直線文・円形刺突文である。ヘラ描直線文の条数は概ね1条～5条であり、2条・3条・4条が大半を占める。複数条の直線文が高いの精度を保って平行に施されているもの、かなり乱れているものがあるが、概して精巧である。直線文の始点と終点の重複部分の観察からは、施文には時計回転・反時計回転の両者が混在している。

かなり精緻な2条・4条の直線文であっても、半裁竹管状工具によって2条ずつ施文しているのは、観察した限りでは先に挙げた遠賀川皿式の搬入品のみである。この資料は、肩部に4条の直線文が施されている。文様帯周辺の器面を詳細に観察すると、上から2条目と3条目の間には器面調整時に施された縦方向ハケメが残存しているのに対し

て、それぞれ上2条と下2条の間はこのハケメが消されていることが確認できたため、半裁竹管状工具による施文と判断することができた。

ヘラ描直線文と刺突文の組み合わせは、近江内の他地域においても認められる文様構成である。針江浜遺跡の資料では、刺突文はヘラもしくは棒状工具による列点文状のものではなく、円形刺突文となっている。ややラグビーボール形を呈しており、植物の茎を工具としたものと想定される。円形の工具を半裁すれば2条1組の直線文を描くことができるにも関わらずこれを用いていないことから、遠賀川皿式の典型的な手法は採用されていないことになる。

多条ヘラ描直線文の中には、文様帯の最上と最下位にあたる直線文のそれぞれ上辺・下辺をハケ工具等で強く押しナデて段を形成するものがある。後述するように壺形土器においても近似する手法が多用されているが、甕形土器では極めて限定的である。

【鉢形土器の調整手法と施文手法】

鉢形土器は、広義のくの字状口縁である屈曲口縁を持つものは内外面共にハケ調整基調と口縁部を含む内面をミガキ仕上げとする2種に区分できる。前者には煮沸具としての機能・使用を示す炭化物の付着が高い割合で認められるのに対し、後者では少なくとも口縁部～体部上半においてはほとんど炭化物の付着は見られない。このことから、甕形土器と同様に煮沸具としての鉢形土器と盛る器としての鉢形土器との機能的な区別が、土器制作段階における調整手法の選択・区分によって決定されていると言ってよさそう。また、甕形土器と同様の調整手法で口縁端部の刻目文と肩部の複数条ヘラ描直線文による文様構成を持つもの、無紋もしくはヘラ描直線文1条を巡らせ実用的ではない把手が2か所に貼り付くものは直径30cmを超える大型品に多く採用されている。一方、雑なオサエ・ナデ・ハケ調整で仕上げる直径20cm前後の小型品はやや不整形であり、内外面に炭化物が厚く付着しているものが多く、小型の甕形土器との機能および形態区分が曖昧である。

小型の鉢形土器類には、直口の深鉢形土器形を呈し口縁部端部にほぼ接して把手を貼り付けたものもあり、甕形土器よりも形態的にも機能的にも分化していると言える。

【底部穿孔のある甕形土器あるいは鉢形土器】

壺形土器の口縁部に設けられる蓋閉じ用の穴については、土器成形時に棒状工具を差し込んで穿孔しているのに対して、内外面に炭化物の付着がある甕形土器あるいは鉢形土器の底部中央部に1か所開けられた直径1cm前後の穴は、焼成後に穿孔されている。その形状には、不整形で内面の剥離が広範囲におよぶものとはほぼ円形で内面の破損範囲が狭く、断面も滑らかなになるものがある。いずれも外面からの力によって穿孔されたものであるが、前者が工具の打撃のみであるのに対して、後者は工具の回転運動を伴う穿孔である可能性が高い。比率としては打撃のみのものが多

数を占めている。

【壺形土器の文様構成・施文手法】

壺形土器類は、無頸壺形土器・太頸壺形土器を少量含みつつ、いわゆる広口壺形土器が主体を占める。締まりの弱い頸部から口縁部が外反あるいは外彎してのびるものと、頸部が直立気味にやや長めにのびるものがある。前者には文様を施さないものが見られる。他、頸部・肩部の文様手法・文様構成としてはヘラ描直線文、削出突帯、幅広の削出突帯＋ヘラ描直線文、貼付突帯、貼付突帯＋ヘラ描直線文、さらに区画直線文＋木葉文・重弧文、ヘラ描直線文＋ヘラ描流水文がある。

文様手法の主体となるヘラ描直線文は、段や削出突帯に通じる1・2条のものから数条～10条程度で幅のある直線文帯を構成するものがある。この多条ヘラ描直線文帯は、後述する長命寺湖底遺跡のように体部上半に複数段施されるものはほとんど無く、また、櫛描直線文状になるものも見られない。施文後に仕上げのヘラミガキを施すものも見られる一方で、ヘラ描直線文帯には施文前においてもミガキ調整を行っていないものも見受けられる。この差異は作り手の違いによるのか、あるいは器形や文様構成、さらには使用目的の違いに起因するのかについては、さらに検討が必要である。

10条を超える多条のヘラ描直線文帯に組み込まれたヘラ描流水文は、直線文の一部に間隙を設け、その上下をコの字の沈線文で繋ぐことにより描く2条1単位のもの、三日月あるいはC字形の沈線で連結した間に1条の直線文を挟む3条1単位の2種類がある。間隙部＝連結部が、ヘラ描直線文を描く段階で意識的に設けられたのか、ヘラミガキによって消されたのかについては即断しかねるが、強めのミガキが当該部分に加えられていることは確かである。

削出しによる段・幅の狭い削出突帯は極めて少なく、突帯系の文様としては幅広の削出突帯＋ヘラ描直線文、貼付突帯、貼付突帯＋ヘラ描直線文が主体となる。突帯は極めて低く、ヘラ描直線文帯の上下をハケで押さえミガキを加えることで形成している。

貼付突帯のほとんどにはハケ工具による刻目文が加えられているが、布目圧痕を伴う棒状工具による押圧刻目文を持つものを1点確認している。また、太めの突帯には、指頭による押引状の押圧文を持つものがある。2条1単位となる突帯は、断面や剥離面の観察から強いヨコナデにより断面をM字状にしたものであることがわかる。さらに、隣接した2条の突帯頂部に加えられる刻目文は、その間隔や方向を詳細に観察すると2条同時に工具を当てて施したものが主体ではあるが、別々に施したと判断できるものも見受けられる。突帯文だけの場合、貼付ける前にヘラで直線が1条描かれているが、文様としてのヘラ描直線文と比較すると細いあるいは浅く、あくまでも位置を示すことを目的として施している。これに対して複数条のヘラ描直線文

帯との組み合わせで突帯が用いられている場合、文様として描かれたヘラ描直線文を利用して突帯が貼付けられている。

口縁部への施文は、端部に刻目文・ヘラ描直線文を施す例が若干認められる他は基本的には行われない。上から見た場合に目につきやすい口縁部内面～頸部内面は極めて丁寧なヘラミガキが施され、かなり光沢のある仕上げとなっているのに対して、頸部から口縁部が大きく外彎する形態の場合、口縁部外面については部分的になる場合が多い。また、外側に向く口縁端部にまでヘラミガキが施されているものは少ない。

【他地域の特徴を持つ土器】

針江浜遺跡の弥生時代前期の土器文化・技術がどこに由来するのか、どこからどのようにもたらされたのかを考えると、地理的には日本海沿岸ルートが第一候補となる。となると壺形土器の肩部を飾る羽状文を持つ資料が存在する可能性を想定しつつ土器群を見たが、結果としては小片を2点確認したに過ぎない。同じく小片ではあるが、直立する口縁部の外面に刻目文を持つ突帯を巡らせ、その直下に複数条のヘラ描直線文を施す甕形土器を確認している。瀬戸内地方に見られる形態・文様であるが、搬入品である可能性は低いと見ている。一方、再々取り上げた様に伊勢湾周辺地域を中心とする遠賀川壱式あるいはこれに近似するものは甕形土器において一定量認められる。

（3）針江浜遺跡の弥生時代前期土器群

針江浜遺跡では、湖南地域の湖岸沿いに展開する弥生文化導入期の遺跡に見られるような縄文時代晩期末の突帯文土器群を伴わず、形態・文様手法および構成から見ても弥生時代前期の中でも新しい要素を持っている。さらに弥生時代中期初頭以降にまで継続していない。このことは、遺跡の立地や分村的な性格によるところも大きいと考えられるものの、土器に見られる規制＝好み凝縮されているという印象が強い。確立されたパッケージと言っても良からう。この「好み」が果たして針江浜遺跡だけのものなのか、高島平野あるいは湖西北部地域のものなのか、あるいは近江全体に適用できるものなのかを見極めていくことが次の課題となる。

3. 長命寺湖底遺跡の弥生時代前期末～中期初頭の土器

（1）遺跡の概要

長命寺湖底遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1984）は、琵琶湖の東岸ほぼ中央部に形成された湖東平野の中に点在する湖東島状山地の一つである長命寺山の山際に面した旧汀線周辺にひろがる遺跡である。昭和57・58年度に琵琶湖開発事業に伴い発掘調査が実施され、旧汀線際では埋没した縄文時代後期の丸木舟が出土していることから縄文時代の遺跡として紹介されることが多

い。縄文時代から近世の遺物包含層を形成する多量の遺物がどこに由来するのかは今のところ明確な遺構を持って示すことはできないが、いずれもほとんど磨滅していないことから極めて近隣にその供給源となる集落などがあった可能性は極めて高いと言えよう。

（２）弥生時代前期末～中期前葉の注目すべき要素

発掘調査ではコンテナ約50箱分の弥生土器が出土しており、その中から実測・観察を行った弥生時代前期～中期前葉の土器は約350点である。ほとんど磨滅していない点においては良好な状態といえるものの、針江浜遺跡と比較すると全形が判明する資料は少なく、文様構成と施文手法の特性を読み取ることができる破片については拓本による資料化を図った。

弥生時代前期末～中期初頭の弥生土器は、形態的な特徴の変化に比べ文様手法・構成においては前期の要素と中期の要素が混在しており、特に破片資料では判断が難しいことが多々ある。長命寺湖底遺跡においても、明らかに弥生時代前期として分類できる一群と太い頸部が長くのび、その外面に櫛描直線文を複数段施す広口壺形土器に代表されるように明らかに弥生時代中期として分類できる一群がある。その一方で、壺形土器の破片には多条のヘラ描直線文から成る文様帯を複数段施すもの、ヘラ描直線文を櫛描直線文状に施すものが目に付く存在としてある。また、いわゆる複帯構成の櫛描文も注目すべき存在である。

【多条ヘラ描直線文と櫛描文】

まず、弥生時代前期～中期初頭に所属すると判断した広口壺形土器の頸部～体部上半に施されるヘラ描直線文には、その条数・文様帯の幅・段数等の様態によって概ね下記のような組み合わせとなる。ただし、部分的な破片資料が大半であるために、頸部と肩部との整合性については検証を要する。

- a - 1 : 頸部～体部上半に、3条～5条程度の幅の狭い直線文帯を間隔を開けて2・3段施す。
- 2 : 肩部に3条ずつの直線文と縦位文から成る区画文を施す。
- b : 頸部に広い間隔で直線文を数条程度施す。これに対応する体部上半の資料については不明瞭。
- c : 頸部～体部上半に、数条程度の直線文帯を施す。段数については不明瞭だが、文様帯の間隔はdと比較すると広いと考えられる。
- d : 頸部～体部上半に、10条～15条程度の直線文を密に描いた4～5cm程度になる幅広の直線文帯を2cm前後の感間隔を開けて複数段施す。

この他、無頸壺の資料ではあるが、口縁部～体部上半の広い範囲に一見すると櫛描直線文のように直線文を3条ずつ複数段施すものがある。

段や幅の狭い削出突帯の形骸化した文様・手法とも言え

る1・2条のヘラ描直線文を持つ資料は全くないとはいえないが、存在するとしても極めて少ない。aからdへの流れは、ヘラ描直線文の多条化の変化を明瞭に表していることから、時期的には概ね弥生時代前期後葉～末に位置づけることができるが、dについては弥生時代前期末に位置づけるか、中期初頭に残る前期的要素をもつものとして評価するか、悩ましい資料である。なお、条数が偶数となる資料については半裁竹管状工具を使用について観察を行ったが、甕形土器も含めて明確に半裁竹管状工具によるものは認められなかった。

次に、櫛描直線文についてもヘラ描直線文と同様にその様態を見てみると、下記のように大別することができる。

- ア - 1 : 数本程度の条線を描く幅数mm～1cm程度の直線文を、文様幅と同程度の間隔をあけて頸部～体部上半に連続的に施す。
- 2 : 直線文幅の2倍程度の間隔をあけて頸部～体部上半に連続的に施す。
- 3 : 条線幅が広く工具幅が2cm前後となる直線文を、文様幅よりも狭い間隔で連続的に施す。
- イ : 複数文様を組み合わせる。
直線文+波状文
直線文+波状文+刺突文
直線文+波状文+流水文
直線文+流水文
直線文+円形刺突文
- ウ : 条線が10本程度になる工具幅の広い直線文を3段程度ずつ施す。
- エ : 複帯構成
- オ : 複帯構成直線文+波状文・複帯構成直線文+扇形文

概観すれば、頸部～体部上半全面を施文部位とし、直線文を基調とし、組み合わせ文様としては波状文・流水文・扇形文にほぼ限定されると言える。これらの文様構成・手法による口縁部～頸部の形態が判明している資料を見ると、弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）の中でほとんどが収まる。したがって、大きく見れば弥生時代前期後葉～中期前葉の連続する時期の土器とすることができる。見た目・視覚的な印象からは、ヘラ描直線文c・dと櫛描文アにはかなりの隔たりがあるが、頸部～体部上半に文様を帯状に連続して施すと言う意匠目的においては共通性は高いとも言える。視覚的効果の観点から、また文様を描く行為を重ねるという意味からはヘラ描直線文dや頸部の多条ヘラ描直線文と複帯構成直線文エは、技術的な系譜・系統は別にして、かなり近いものがある。

【複帯構成の櫛描文】

櫛描文を間隔を開けずに、あるいは若干重複させて施し、幅広の文様帯とする複帯構成の櫛描文と言えば、弥生時代中期中葉の伊勢湾周辺地域を中心とする貝田町式の壺形土

器やその影響下にある在地土器においてはなじみ深い手法ではあるが、中期初頭のものについては、これまであまり実見する機会もなくほとんど注意を払っていなかった。そんな状況の中、三重県において複帯構成の櫛描文を多用する当該期の資料を見る機会を得た。これを契機として、近江内においても散見される当該期の複帯構成の櫛描文が、長命寺湖底遺跡ではかなり目立つ、つまり視覚的に特徴的であり通有の櫛描直線文との峻別が安易であり、かつ破片

数が一定量あり、複数個体になることを再確認した。

伊勢・尾張といった伊勢湾周辺地域の弥生時代中期初頭に特徴的な広口壺形土器の頸部・体部上半の幅広直線文帯は、「多条沈線工具」や二枚貝腹縁を工具として直線文を隙間無く複数段施して複帯構成の文様帯としている。その直線文＝工具痕は、特に条痕文系土器の器面調整・施文工具でもある二枚貝を使用している場合、通常の櫛描文とは明らかに異なる。対象資料においてもこの点に留意して観察したところ、伊勢湾周辺地域と同様に二枚貝あるいは二枚貝と同様の痕跡を生じさせる通常の櫛工具とは異なる工具による条痕状の直線文となるものと通常の櫛描文と同じものがあり、前者の中には胎土が在地産とは異なるもの＝搬入品が含まれていることを確認している。湖西北部地域で伊勢湾周辺地域に由来する資料が出土するよりは、伝統的に山地を介して生活圏・文化圏・流通圏を共にする湖東地域においては伊勢湾周辺地域由来の資料・要素の存在は自然である。長命寺湖底遺跡に近い近江八幡市大中の湖南遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2004）や東近江市宮の前遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2005）、あるいは湖南地域に所在する守山市小津浜遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2002）などでも複帯構成の直線文を持つ資料は確認されており、今回の資料とそれらとの比較検討も必要である。

複帯構成の直線文帯と組み合わせられている他の文様には、波状文・扇形文がある。直線文と波状文の組み合わせは、通常の櫛描文様においても出現頻度は高く、これまで地域性を表徴するものとは認識していなかった。ところが、三重県の複帯構成直線文と波状文の組み合わせを持つ資料を前に、「直線文と波状文の組み合わせは近江に多いですね。近江の影響を受けていると思うんですけど。」との声を耳にした。筆者は、櫛描文イデ見たようにこの時期の文様要素としては通有であり、これは近江に限定した現象でないことから、その組み合わせ自体はどこかに出自を求めるべきではないとした。むしろ、複帯構成直線文と意匠化された波状文との組み合わせこそが、本場＝伊勢湾周辺地域の特徴として理解するべきであると考ええる。確かに、特に弥生時代中期中葉以降に顕在化する粗いハケ調整土器群や後期の近江型受口状口縁土器群の目印ともなる特徴的な波状文から、他地域の研究者にとっては近江は波状文を多様する地域であるとの印象が強いのかもしれない。近江の弥生土器の特性がなかなか認知・理解されていないことを痛感する。

さて、複帯構成の直線文は、器面調整が装飾性をあわせ持つと言う手法からも条痕系土器群の技術的体系からの連続性・関連性が肯首される。近江の弥生土器に見られる特徴は、顕在化させた粗いハケ調整と加飾への強い指向性である。その萌芽は、遠賀川式土器群を導入して間もなく、

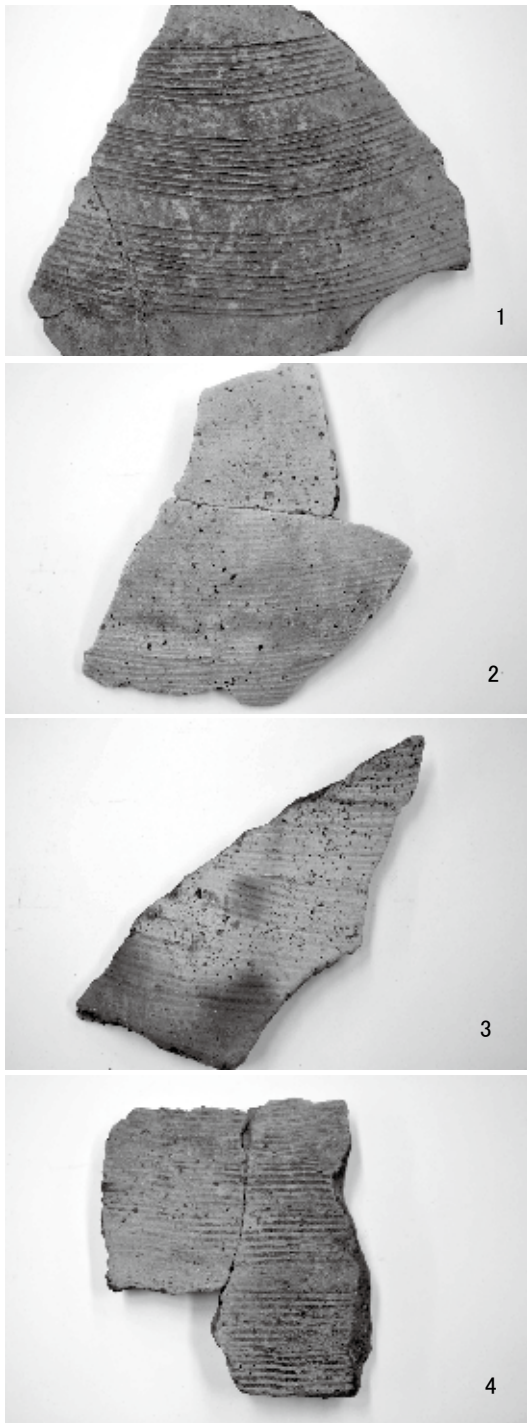


図3 長命寺湖底遺跡のヘラ描多条直線文（1）と複帯構成櫛描直線文（2～4）

口縁部内面への横方向ハケ調整仕上げあるいは外面の地紋的横方向ハケ調整仕上げに見られると言っても良からう。これは、近江よりさらに広い範囲で見られるものであるが、その傾向をさらに助長する、あるいはその指向性にまさに適したものが複帯構成直線文との考えるのは言い過ぎかもしれないが、伊勢湾周辺地域との関係は単発・偶発的なものでもなく、またどちらかからの一方通行的なものではないことを考慮して評価する必要はある。

（３）長命寺湖底遺跡の弥生時代前期～中期前葉の土

多条ヘラ描直線文と櫛描文・複帯構成文様が混在する弥生時代中期初頭を中心とする時期の土器群は、遺物包含層であり、破片資料が多ことから時間的な変遷過程なのか、それとも混在という状態自体が弥生時代中期初頭の実態を反映しているのかを直裁的・短絡的に評価することはできない。型式学的な作業と同時期の他資料との比較検討が必要となる。

４．おわりに-弥生土器の「近江らしさ」を求めて

「近江らしさ」とは、地域のアイデンティティーであり「近江」とは何かを考える上で手がかりとするものである。主に弥生土器を対象資料として「近江」とは何かといった課題に取り組んでいる筆者にとっては、どうしても力点・視点の設定がこの課題に繋がるため、観察して得た情報に対する見方・解釈にはかなりの偏向があることは十分に承知しているところである。特に、弥生時代前期末～中期初頭は、その後弥生時代を通して堅持される近江独自の土器となるための諸属性がまとまりを見せる時期である。その手がかりとしたのは条痕文系土器と粗いハケメ調整土器であり、遠賀川系土器様式とはあきらかに異なる特徴をそなえた土器であった。針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡の当該期の土器資料は、確立された土器様式・技術体系として近江に導入され定着した遠賀川系土器群の中にその胎動を見ることができるのか、さらに、それらが外的要素とどのように関連するのかについて知るためにも、興味深い対象である。

註

- （１）粗いハケメ調整とは、条線の痕跡が鋭く、その間隔や工具の当たり幅が不揃いとなる特徴的な器面調整であり、明らかに通有のハケ調整や二枚貝あるいは櫛・ハケ状工具による条痕文とも異なる。弥生時代前期末～中期初頭に近畿地域で盛行する大和型甕や伊勢湾周辺地域に広がる条痕文系土器との関連性に注目されることが多いが、筆者はこの粗いハケメ調整が装飾性を兼ね備え、受口状口縁土器を代表とする近江の在地土器群に弥生時代後期末にまで継続することに注視し、弥生土器における近江らしさを表徴する属性として捉えている。

文献（著者名・刊行機関名50音順・刊行年順）

- 小竹森直子（1990）「近江における条痕系土器の1例」『紀要』第4号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小竹森直子（1997）「地域を考える-弥生時代の近江の場合-」『人間文化』第2号 滋賀県立大学人間文化学部
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1984）『長命寺湖底遺跡発掘調査概要』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1988）「針江大川舟溜航路浚渫針江浜遺跡」『文化財調査出土遺物仮収納保管業務昭和62年度発掘調査概要』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1989）「針江大川舟溜航路浚渫（2）針江浜遺跡」『文化財調査出土遺物仮収納保管業務昭和63年度発掘調査概要』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1990）「針江大川航路浚渫（3）針江浜遺跡」『文化財調査出土遺物仮収納保管業務平成元年度発掘調査概要』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2002）『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6 小津浜遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2004）「2-4 史跡大中の湖南遺跡」『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2005）「2-10 宮の前遺跡」『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書Ⅱ-1』

（こたけもり なおこ：調査整理課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.25 2012.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage